

安曇誕生の系譜を探る会
勉強会資料

安曇族の謎に迫る

平成 25 年 8 月
安曇誕生の系譜を探る会

目 次

1	安曇野の現代文明のはじまり	2
2	安曇族（安曇氏族）とはなにか	2
3	安曇氏族はいつ、どこから、なぜやってきたか	4
4	安曇氏族の一族	4
	1) 安曇連	
	2) 海犬養連	
	3) 凡海連	
	4) 安曇犬養連	
	5) 八木造	
5	安曇氏族の特性	6
6	阿曇連比羅夫は軍人か	8
7	安曇族ゆかりの地とその衰退状況	9
	1) 福岡市東区地域	
	2) 高島市安曇川町地域	
	3) 田原市旧渥美町地域	
	4) 兵庫県太子町地域	
	5) 舞鶴市丹後地域	
	6) 安曇平地域	
8	安曇族ゆかりの地	15
9	綿津見命神社の調査	16
添付図	ゆかりの地分布図	17

1 安曇野の現代文明のはじまり

安曇平では一万年以上前から縄文人が定住して縄文文化を育てていた。そして弥生時代中頃、つまり西暦元年頃に稲作文化を中心とした弥生文化が伝播してきた。これは、弥生人が移住してきて弥生文化を定着させ、広めたことによるものである。そのとき先住民であった縄文人たちは弥生文化を積極的に受け入れ、弥生人と混血融合して安曇平の開拓に取り組んだと考えられる。安曇平にある数多くの弥生時代遺跡からこうした状況を読み取ることができる。縄文時代から弥生時代において安曇平は原生林に覆われていたとのことであり、水田地帯として開拓されるまでには随分と長い期間がかかり、大変な困難と苦労が積み重ねられたと思う。弥生人と縄文人そして混血融合して誕生した人々は安曇平の開拓者であり、安曇平に住む人々の祖先というべき人々だったと言える。彼らを安曇人と呼んでいいと思う。

私は安曇郡が成立した時代は4世紀後半から5世紀はじめ頃と推測している（「安曇誕生の系譜をさぐる」（市民タイムス連載文）参照）。安曇郡は安曇族の氏族名である「安曇」をもって名付けられたと言われている。これは多くの研究者や学者の一致する見解である。しかし、安曇族はいつ、どこから、なぜやってきたのかと言うことは、深い謎であり、そして大きなロマンである。安曇郡の古代史を知る上で安曇族の実像を知ることは非常に重要なことである。しかし、安曇族の実像は深い謎に包まれており、いまもなおあいまいなままである。

安曇郡の古代史を探るための切り口として二つある。一つは安曇平の考古学的史料と歴史文献史料に基づいて探る方法である。二つ目は前述した安曇族の実像を探ることによって、安曇郡の建郡の状況を探る方法である。安曇誕生の系譜を探る会ではこうした観点から安曇郡の古代史を探ろうと勉強会を続けている。

これまで安曇族に関する調査・勉強を続けてきているが、知りえた安曇族情報はわずかであり、日暮れて道遠しという状況である。そして、知れば知るほど安曇族はさまざまな様相を持つ大きな氏族であることが分かる。それで、途中段階であるが今後の安曇族研究のガイドラインとして、これまでに分かったことを整理し、安曇族がどんな様相を持っているのかそしてあいまいなままになっている謎はなにかについて整理した。

2 安曇族（安曇氏族）とはなにか

安曇族は日本書紀、古事記（以下記紀という）等の古文書に登場する氏族であり、古代においては数多くいた海人族の中の最有力氏族だったとされている。北九州福岡市東区付近の糟屋郡安曇郷、志珂郷（志賀島を含む）を本拠地として活躍していた。

記紀には安曇連（あづみむらじ）は綿津見命（わたつみのみこと）（豊玉彦命また海神龍王ともいう）、また児神の穂高見命（宇都志日金拆（うつしひかなさくのみこと）ともいう）を祖神として祀っていると記載されている。新撰姓氏録しんせんしやうじろくという平安時代に書かれた書物では、綿津見命を祀る氏族として、安曇連以外に4氏族（詳細は4. 安曇氏族の一族に記載）が記載されている。そこで綿津見命を祖神として祀る氏族全体を安曇氏族または安曇族と考えることにする。安曇族という呼び方に異議を提示する研究者もいるが、安曇氏の一族全体と言うことと理解すれば、あまり目くじらを立てる程のことではない。

北九州地域は紀元前400～300年頃に大陸から渡来した人々が定着し弥生文化を繁栄させた地である。少人数ごとのグループがたびたび船で渡ってきたと推測されているが、その詳細は不明である。渡来人たちは水稻栽培を中心とする弥生文化を繁栄させ、急速に勢力を拡大した。この渡来人たちは弥生人と呼ばれている。この人たちは血縁的そして地縁的集団であり、幾つもの小部族として活動してい

たと思われる。その後、渡来人・弥生人たちは弥生時代のはじめ頃から日本列島の東方へ進出していき、弥生文化を日本中に広めていった。

安曇族はこの渡来人たちのなかの一部族だったと考えられる。安曇族が日本に渡来する以前に、中国大陸ないし朝鮮半島において氏族として形成していたとは考えられない。多人数を擁する氏族が大きな集団として渡来してきたというようなことを示す史実はなにもない。安曇族は渡来人たちと同様に、家族的な少人数で日本に渡来し、そして血縁的・地縁的に形成され、増大した部族と思われる。当時日本では文化レベルは中国に比べてはるかに低く、文字も使われていなかった。つまり渡来人たちの文化レベルは低かったと考えられ、中国社会の上層の氏族とは考えられないのである。とは言うものの、当時の安曇族の状況については確たることはなにも分かっていない。

その後安曇族とされる人々は、弥生人たちと同様に東方へ進出していき、全国各地に進出し、あちこちに定着した。その場所は安曇族ゆかりの地である。長野県の安曇郡はその一つである。

安曇という氏族名を名乗り始めたのはいつの時代なのだろうか。日本書紀の応神天皇紀(273年条)に阿曇連の祖大浜宿禰を海人の^{あま} 宰^{みこともち}(統率者)に任命したとする記述がある。これが史実かどうか、年代が正しいのかどうか不明であるが、この頃にはまだ「阿曇」氏とは名乗っていない。そして日本書紀によると401年に阿曇連浜子が天皇暗殺のクーデターに参加したとの記述がある。これによると、5世紀はじめには阿曇と名乗っていたことになる。

一方5世紀代に倭国の5人の王がそれぞれに中国へ遣使し朝貢したことが『宋書』(倭国伝)に記載されている。その時の上表文には倭王をはじめ倭人たちの氏族名は記載されていない。

また雄略天皇の時代(5世紀後半)の鉄剣銘文がある。一つは埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣銘文である。それは乎獲居(おわけ)と言う人が自分の系譜と、剣を造った経緯を記したものであり、471年7月と記されている。この銘文には乎獲居の氏族名は記載されていない。二つ目は熊本県江田船山古墳出土の鉄刀銘文であり、そこに刀の持ち主が厩利弓(むりて)であることおよび刀の謂れが記されている。この厩利弓は名前であって、氏族名ではない。乎獲居、厩利弓はともに雄略天皇の側近であり大和王権にとって重要人物だったと考えられるのであるが、氏族名を持っていなかった。

とはいえこの頃には葛城、物部、平群、大伴、吉備、毛野などと氏族名を名乗る部族がいた。氏姓制度が確立した時期は大和王権が確立される頃、つまり5世紀代という考えが通説となっているが、あまり明解ではなく、しかも画一的ではなかったようである。そうすると古代からの血縁集団が氏族名を名乗り始めたのは4世紀後半から5世紀にかけてのころと思われる。安曇氏族の場合も同様と考えられ、4世紀から5世紀にかけてのころから阿曇と言う氏族名を名乗ったと思われる。

安曇氏族に関する記述は記紀に多数あるが、それらは前後の事情のない断片的なものばかりであるために、それらから安曇族の全体像を理解することは困難である。日本書紀の持統天皇紀691年条に、当時の古くからの有力氏族18氏に対してそれぞれの祖先の墓誌を提出させたとある。18氏の中に阿曇連も入っており、当時において古くからの有力氏族として認知されていた。当時は日本書紀の編纂中であり、墓誌はそれに取り入れたり参考にしたりにするために使われたと考えられる。従って日本書紀の安曇氏族に関する記載事項は安曇氏の墓誌をもとにしたものが多いと考えられる。墓誌は氏族の表看板であり、いろいろな誇張や飾りがあり、また伏せられたこともあると思われる。とすると、日本書紀に記載されていることがすべて史実であるとは言えない。その点を考慮して読む必要がある。

安曇氏族は弥生時代から平安時代はじめまでの約1000年近くの長いあいだ歴史の表舞台で活躍している。活動地域は北九州地域から瀬戸内海沿岸、畿内地域、東海地域にかけて、そして山陰の日本

海沿岸地域、さらに信濃国安曇平と全国的に広く分布している。安曇族は古代史の長い期間にわたって、そして日本の広範囲の場所で活動していたのである。すると、文献や伝承の中に出てくる安曇族に関する事象について、それがいつの時代の事象か、どこの地域の出来事かという時間軸と地域軸の中で仕分けして見なければならない。記紀等の古典に記載されている断片的情報をごちゃ混ぜにしてしまうと、とんでもない誤解が生じることになる。そうした仕分けをせずにそれらの断片的情報をもって、それらが安曇族の全体像であると理解すると、大きな錯覚を生じてしまう。これは避けなければならない重要な留意点である。これまで多くの学者・研究者が調査研究してきているにも拘わらず、いまだにあいまいなままであるということは、ここに大きな原因があると思う。

3 安曇氏族はいつ、どこから、なぜやってきたか

安曇郡に安曇氏族がいたということは疑いないことと考えるが、安曇郡における安曇氏族の痕跡は非常に少ないことも事実である。はっきりした痕跡としては、安曇郡という地名、川会神社と穂高神社の存在、正倉院御物の安曇郡前科郷戸主安曇部^{あづみべまひつじ}真羊と書かれた麻布という3点くらいである。そのため、安曇郡には安曇部(安曇氏の従属集団)はいたが安曇氏族はいなかったと言う研究者もいるようである。

安曇氏族がいつ、どこから、なぜやってきたかということは、安曇野市民にとって自分たちの祖先のルーツであり非常に興味深い問題である。しかし、結論を出すことを急ぎすぎてはいけない。じっくりと当時の状況を調査研究してから結論を出すべきと考える。まず、いつ来たかと言う問題については、安曇氏族が安曇平へ進出してきたとき、安曇平は開拓されていたかどうかを明らかにすることが先決である。安曇氏族の進出以前に安曇平が開拓されていたのであれば、そこには安曇とは異なる別の地名がついていたと考えられる。その地名を探すことが必要である。しかし私は、安曇平が開拓された後から安曇氏族が進出してきて、先住の弥生人や縄文人を征服して、地名を変えて安曇郡として建郡したとすることは相当に無理があると考えている。そこで最初に進出してきて開拓した人々が安曇氏族だったと推測している。すると安曇平が開拓され始めた弥生時代に安曇氏族が進出してきたということになる。これはいまのところ仮説であり、今後考古学的、文献史的な検証が望まれる。

つぎに、どこから来たかと言うことについては、東海方面ルートと日本海方面ルートについて安曇族の痕跡があるかどうかを明らかにすることが必要である。今のところ、名古屋・豊橋・浜松地域では安曇族の痕跡は強く残っているが、新潟・富山地域ではほとんど見当たらない。このことから、私は東海方面から進出してきたと推測している。これもやはり仮説であり、今後さらに検証していく必要がある。

なぜやってきたのかと言うことについては、今のところ全くあいまいとしか言えない。鮭を追ってきたとか、翡翠原石を求めてやってきたとかと言う説があるが、その根拠は乏しく納得できない。すでに縄文時代において、千曲川で鮭漁がおこなわれており、また糸魚川上流で翡翠が採掘され、加工されて全国各地へ伝えられていたのである。安曇氏族が安曇平へやってくる魅力にはなりえなかったと思う。

いまはこのような状況であり安曇族および安曇郡の古代に関する調査研究はまだまだこれからと言わざるをえない。

4 安曇氏族の一族

古くは阿曇連と表記されていたが、713年の好字令に関連してそのころ以降は安曇連と表記されている。阿曇連と安曇連は全く同一氏族と考えてよい。しかし、平安時代に書かれた新撰姓氏録では阿曇と安曇の両方の表記があり、どのように区別していたのか不明である。本稿では特に強調する場合には

阿曇と表記し、それ以外は安曇と表記している。

安曇氏族について、黛弘道氏が「海人族のウヂを探り東漸を追う」（『日本の古代8海人の伝統』、大林太良編、中央公論、1996）でかなり詳しく書いており、その中で5氏族あると指摘している。それに基づいて、その他の情報も加えて、安曇5氏族について概略を記すと次のようである。

1) 安曇連（天武天皇のとき宿禰を賜る）

日本書紀の神代紀に「底津少童命・中津少童命・表津少童命は、是阿曇連等が所祭る神なり」（『日本書紀』岩波文庫、坂本太郎他よりの引用である。以下同様）とある。底津少童命・中津少童命・表津少童命は底津綿津見命・中津綿津見命・表津綿津見命のことであり、伊弉諾尊が黄泉の国から逃げ帰ってきて、海で禊払ったときに生まれた神である。このとき同時に住吉神である筒男命（三柱いる）も同時に生まれている。さらにその後で天照大神が生まれている。綿津見命は天照大神の兄に相当する神である。この綿津見命誕生の記述は安曇連氏の墓誌に基づいて書かれたと思われ、当時安曇氏族が自分たちの祖神は綿津見命であると認識していたと思われる。ただし、住吉神である筒男命との関係はどのようなか、天照大神との関係はどのようなかと言うことは全く分からない。

さらに新撰姓氏録では安曇連は綿津見命の児である穂高見命の末裔と記されている。また日本書紀には「阿曇連の祖大浜宿禰」とある。安曇連は安曇氏族の本宗家と言える氏族であり、記紀に数多く登場している。阿曇連浜子、阿曇連百足、阿曇連比羅夫等々がいる。

弥生時代においては福岡市東区地域に居住していたが、大和王権が成立する400年代にはすでに畿内地域に移動し定着しており、勢力を張っていたと考えられる。これは、日本書紀によると401年に阿曇連浜子が淡路島の海人を率いて天皇暗殺クーデターに参加したとの記述があり、これから推測できる。

新撰姓氏録（平安時代、815年作成）には安曇宿禰は京都居住、安曇連は河内国居住と記されている。しかし7世紀頃には阿曇連百足は摂津国難波の浦上に住んでいたこと、また摂津国難波には安曇江や阿曇寺があったことが分かっており、4～8世紀頃には安曇連は摂津国付近でも活躍していたと考えられる。

2) 海犬養（あまのいぬかい）連（天武天皇のとき宿禰を賜る）

新撰姓氏録では綿津見命の末裔とされ、京都居住と記されている。そして『古代氏族系譜集成』（古代氏族研究会、昭和61年）によると、大浜宿禰の弟の小浜宿禰の末裔とされている。

もとは福岡市博多駅の東・南付近を本拠とし、那津官家の守衛を職掌としていた（前出の黛弘道氏「海人族のウヂを探り東漸を追う」より）とのことである。日本書紀によると、那津官家は宣化天皇の536年に、非常の時に備えて全国各地から食料を集めて、それを保管するために設置されたものである。その後安閑天皇の538年に、屯倉の守衛として犬養部が設置された。そして那津官家にも同様に守衛として犬養部が設置されたと考えられる。そのとき、那津官家の犬養部を統率する氏族として海犬養連が成立したと推測される（後述p10参照のこと）。

乙巳の変（645年）で中大兄皇子たちが蘇我入鹿を暗殺する際、暗殺用の剣を宮中に持ち込んだ者は海犬養連勝麻呂である。その他いろいろな功績があり、平城宮の門の一つが海犬養門（平安宮では安嘉門）と称され、その守衛にあたったとされている。

海犬養宿禰岡麻呂が聖武天皇の天平6年（734年）の詔に応じて作った歌が万葉集に載っている。

これは聖武朝を賛美する歌で巻6を代表する一首と評価されている。

御民^{みたみ}われ生ける^{しるし} 駿あり天地の栄ゆる時に遭へらく思へば (万6-996)

また藤原広嗣の乱(740年)のとき、海犬養(宿禰)五百^{いおより}依が天皇軍に軍曹として参加している。

3) 凡海(おおしあま)連(天武天皇のとき宿禰を賜る)

新撰姓氏録には綿津見命の兒穗高見命の末裔とされ、京都および摂津国に居住と記されている。しかし丹後国(舞鶴市旧加佐郡地域)に凡海郷があり、そこは古代では凡海連の居住地だったと考えられる。

また、『古代氏族系譜集成』(同上)によると、大浜宿禰の弟の小浜宿禰の末裔とされている。

凡海連は大海人皇子(後の天武天皇)の養育者であったとする説がある。日本書紀によると天武天皇の喪の時に、最初に大海(おおしあま)宿禰が天皇の幼時のことを^{しのびごと}誄(死者の生前の功德を讃えて哀悼の意をのべること)したとあり、大海宿禰が大海人皇子の養育者だったと考えられている。そこで大海宿禰の「おおしあま」という読みと凡海宿禰の「おおしあま」の読みが一致することから、大海宿禰=凡海宿禰=天武天皇の養育者となったと思われる。しかし、この見解は興味深いのであるが、もっとはっきりした根拠が必要であり、にわかには納得しがたい。摂津国の住吉神社には境内社として大海神社があり、ここは「おおわたつみ」とか「だいかい」と読んでおり、「おおしあま」とは言わない。大海宿禰との関係はどうか、不明である。

4) 安曇犬養連

新撰姓氏録には阿曇犬養連と表記され、綿津見命の三世孫穗^ほ己^こ都^つ久^く命^{のみこと}の末裔とされ、居住地は摂津国と記されている。

『古代氏族系譜集成』(同上)によると、海人の宰となった大浜宿禰の次男の末裔に阿曇犬養連がおり、信濃国安曇郡に定着し、穂高神社を奉斎したとある。しかし、いつ、どのようにして安曇平へ進出してきたか不明である。

5) 八木造(やぎのみやつこ)

新撰姓氏録では和^{わたつみ}多^た罪^{つみ}豊^{とよ}玉^{たま}彦^{ひこ}命^{のみこと}の兒の布留^{ふる}多^た摩^ま乃^の命^{のみこと}の後とあり、黛弘道氏は安曇族としている。これについては大場磐雄氏も同様である。しかし『古代氏族系譜集成』(同上)によると、布留多摩乃命は宇都志日金拆命の弟であり、安曇氏族とは別系統のようにも思われるが、しかし確たる根拠はない。

新撰姓氏録には京都居住と記されているが、河内国和泉郡八木郷(現大阪府岸和田市八木地区)が本拠地と言われている。

これらの情報だけでは安曇氏族の実像は雲を掴むようである。5つの氏族が誕生した時代、その事情、相互の関係、全国にある安曇族ゆかりの地がどの氏族に対応するのか。とりわけ安曇平へ進出してきた事情はどうか等々分からないことばかりある。これらは今後調べていかなくてはならない課題である。

5 安曇氏族の特性

安曇氏族は海人族と言われ、それが最大の特徴とされてきた。海人族と言われる根拠は次のようなものである。しかし、それらには必ずしも賛同できないところが多い。

一つ目は、安曇氏族は海の神である綿津見命を祖神として祀っていることである。この点については異論のないところである。

二つ目は、弥生時代安曇氏族は北九州の海沿いで生活しており、漁撈や海上交通に長けていたことである。おそらく、安曇氏族の一部は海人的な生活をしていたと考えられる。しかし、安曇氏族全体が海人だったとは考えられない。安曇氏族が本拠としていた福岡市東区付近の旧糟屋郡地域は弥生時代には奴国であった。ただし奴国の王の居住地は現在の春日市（須久岡本遺跡周辺）地域であった。奴国地域では水稻耕作が盛んに行われ、青銅器生産も盛んに行われていた。奴国王は後漢へ朝貢して金印を授与されている。その金印が安曇氏族の本拠地である志賀島で出土していることから、安曇氏族と金印の強い結びつきを思わせ、安曇氏族は奴国で重要な地位を占めていたと思われる。すると安曇氏族は水稻耕作と青銅器製造に関しても強く関わっていたと思われ、安曇氏族がすべて海人集団だったとは考え難いのである。

三つ目は、日本書紀の応神天皇紀4年条（273年）に「^{ところどころ}処処の海人、^{さばめき}訕或きて命に従わず。則ち阿曇連の祖大浜宿禰を遣わして、其の訕或を平ぐ。因りて海人の^{みこともち}宰とす」とあり、これによって安曇氏族は海人の統率者となったと考えられている。

しかし、その後履中天皇のとき（401年）に阿曇連浜子は淡路島の海人を率いて天皇暗殺クーデターに参加し、失敗した。そして死罪を宣告されたが、減刑されて入れ墨の刑となった。この事件は天皇（当時は大王）暗殺という国家反逆であり、重罪事件である。安曇連は当然のこととして海人の統率者としての任務を罷免されたと考えられる。その後の日本書紀には、海上交通や船に関すること安曇氏族の記述はなにもない。欽明天皇の時（553年）王辰爾が^{ふねのふひと}船史（船の行政管理官と思われる）に任じられている。また朝鮮遠征や造船の任務では他の氏族の活躍が記載されている。つまり、安曇連浜子以降、安曇氏族は海人の宰としての任務をはく奪され、海人族的な特性は失ってしまったと考えられるのである。

四つ目は万葉集に掲載されている筑前国志賀^{あま}白水郎歌がある。神亀年（724～729年）に、糟屋郡志賀村の白水郎荒雄が宗像郡の百姓津麻呂から頼まれて、対馬まで食料を船で運んだのであるが、しかし暴風雨のために遭難してしまう。この遭難事故を悼んで山上憶良が詠んだ歌である。志賀村は安曇連の支配地であり、白水郎荒雄は安曇連の配下であった。そして白水郎荒雄は海人であり、海上交通に長けていた。だから安曇連は海上交通に長けた海人族だという説である。

白水郎荒雄は安曇連の配下であり、海上交通に長けた海人族だということは納得できるが、安曇氏族が海人族ということにはならない。そして、当時安曇連が健在であり、海人族としての力を持っていたとしたら、大宰府はなぜ直接に安曇連（荒雄）に食料輸送を命じなかったのだろうか。そして荒雄はなぜ暴風雨になるような日に出発したのだろうかと言うことが疑問になる。

こうした海人的特徴に対し、他方で農耕民としての特徴も多く持っている。播磨国風土記によると、孝徳天皇（645～650年）の時、阿曇連^{ももたり}百足、阿曇連^{たむ}太牟が播磨国の^{いわみのさと}石海里で大規模な灌漑工事を行い、水田開発を行った。この灌漑工事は近くの川は水量不足であったために、その川を越えた数キロ離れた遠くにある揖保川から導水するという難工事であったが、それに成功している。このことは安曇連が水田開発や大規模な灌漑工事を行う能力を持っていたことを示している。そして風土記によると、この水田開発は天皇の勅により行われたとのことであり、このころ安曇氏族は天皇の近くに仕えていたと考えられる。また孝徳天皇の時（645年）には東国の国司に任命されている。これらは海人とは関連のないことである。

そして日本書紀によれば推古天皇のとき阿曇連は法頭（寺の財政を監督する職であり、俗人が任命されたと考えられている）に任命されている。さらに孝徳天皇の時には安曇氏の氏寺として阿曇寺が摂津国難波付近にあった。これは四天王寺や法隆寺に続く寺であり、国学博士だった旻法師がここで療養しているとき孝徳天皇が見舞ったという寺である。建築物の詳細は不明であるが、立派な寺構えだったと思われる。安曇氏がこの頃に氏寺を建立する力を持っていたということは、安曇氏の勢力が盛んだったことを示している。そして仏教という外来文化の吸収にも積極的な文化的に先進的氏族だったと考えられる。

安曇氏族は大きな集団であったと考えられ、その中には海人と言われる人々があり、また農耕を主とする人々があり、そして青銅器製作を行う人々もいたと思われる。さらに仏教にもかなり深く関与していた文化的氏族だったと考えられる。このように安曇氏族が海人族だとは一概に言い切れない。安曇氏族は海人族だったという先入観を捨てて、白紙の状態から安曇氏族の全体像を描くことが必要である。

6 阿曇連比羅夫は軍人か

阿曇連比羅夫に関する記述が日本書紀に現れるのは、皇極天皇紀の642年条である。内容は、百済使人（百済に遣わされた使人）であった阿曇連比羅夫が、推古天皇の崩御に際し百済国の弔問使を案内して筑紫国へ到着したこと、比羅夫自身は天皇の葬儀に参列しようと一人先行して大和へ来たというものである。この時阿曇連比羅夫は百済国への使者、つまり外交官だった。

この頃の安曇連氏の動きとしてつぎのようなものがある。この少しあと斉明天皇紀657年条に阿曇連類垂が西海使として百済国から帰国し「駱駝一箇・驢馬二箇献す」とある。また天智天皇紀669年条に「阿曇連類垂を新羅に遣わす」とある。つづいて、天武天皇紀672年条に「阿曇連稻敷を筑紫へ遣わして、天皇の喪を郭務宗に告げしむ」とあり、さらに682年条には「川嶋皇子・・・阿曇連稻敷・・・（全員で12名列記されている）に詔して、帝紀及び上古の諸事記し定めしめたまふ」とある。これらのことから、この頃安曇連氏は大和政権の中枢部におり、外交や文化面において活躍していることが分かる。阿曇連比羅夫、阿曇連類垂、阿曇連稻敷の三人がどのような関係だったか不明であるが、親子孫の関係かあるいは親族だったと推測される。そして安曇連氏は外交官ないし文官氏族だったと考えられる。

一方、これまで阿曇連比羅夫は武人だったと言われている。その根拠は日本書紀の次の記述である。天智天皇紀661年条に、「8月に前將軍大花下阿曇比羅夫連・小花下川辺百枝臣等、後將軍大花下阿部引田比羅夫臣・大山上物部連熊・大山上守君大石等を遣わして、百済を救わしむ。仍りて兵杖・五穀を送りたまふ」とある。これは新羅と唐に攻められて苦戦していた百済を救援するための行動であり、大和朝廷は百済へ武器と食料を送ったのである。この時、阿曇連比羅夫は將軍として参加していた。そして翌年の662年条に「大將軍大錦中阿曇比羅夫連等、船師一百七十艘を率て、豊璋等を百済国に送りて、宣勅して、豊璋等を以て其の位を継がしむ」とある。これらの記述が根拠となって、阿曇連比羅夫は軍人であり、大將軍であったと言われている。そして安曇族は海軍として活躍していたと言われている。

しかし森公章氏は『白村江以後』（講談社、1998年）なる著書でこの時の状況を丁寧に読み解き、次のように指摘している。日本書紀には661年8月の救援部隊派遣の後の9月条に「大山下狭井連檳榔・小山下秦造田来津を遣して、軍五千余を率て、本郷に衛り送らしむ。是に、豊璋が国に入る時に、福信迎へ来、おがみて国朝の政を奉て、皆悉に委ねたてまつる」と記載されている。つまり王子豊璋が

百済へ帰国し、王位に就いたのは、661年9月である。すると662年に阿曇連比羅夫が船師一百七十艘を率いて豊璋等を百済国に送っていったとの記述とは矛盾する。そして662年記述では、豊璋等を送っていったものは阿曇連比羅夫のみであり、安曇連氏の墓誌に基づいて書かれたと考えられ、この記述の信憑性は低いとしている。森氏のこの説によると阿曇連比羅夫は軍人だったとは言えない。

また斉明天皇紀660年条に「百済の為に、將に新羅を伐たむと欲して、乃ち駿河国に勅して船を造らしむ」との記述がある。さらにこの頃阿部臣比羅夫が日本海から越後方面の蝦夷討伐そして肅慎討伐の遠征を行っている。この頃、安曇連氏は朝廷の中枢部で活躍していたのであるから、海戦や造船に力があるのであれば当然のこと表に出てくると思えるのであるが、現実にはそうになっていない。

これらの状況から考えて、この頃においては海軍や造船における安曇氏族の影は薄いと言わざるをえない。さらに阿曇連比羅夫は阿曇山背連比羅夫とも記載され、居住地が山背（山城国、大和国の北方、京都の南部地方）だったと思われる。すると海を離れ、山城国に住んでいたということになる。阿曇連比羅夫が軍人だった、そして安曇族は海上戦闘部隊だったという説は大いに疑問である。それらは今後の研究課題である。

7 安曇族ゆかりの地とその衰退状況

安曇氏族の全体の歴史を大略すると次のようである。安曇氏族は弥生時代から古墳時代にかけてのころ、福岡市東区付近で活動しており、海人の統率者として勢力盛んだった。そして弥生時代のはじめころから全国へ進出し、畿内・東海・山陰方面へも進出した。古墳時代から奈良時代にかけて、摂津国方面に拠点をもち大いに活躍していた。ここには阿曇寺、安曇江があり、海上交通も盛んであり、糟屋郡地域よりもこちらの方が栄えていたと推測される。しかし阿曇連浜子が住吉仲王子の天皇暗殺クーデターに加担し、敗れた事件（401年）以降においては、その威勢はすっかり衰え、大和政権の表舞台からは消えてしまう。そして推古天皇のころから再び大和政権の表舞台に登場し、6世紀後半から8世紀中頃にかけて大いに活躍した。この頃には安曇連、海犬養連、凡海連が登場し畿内地域、とくに摂津国難波地域で大いに活躍していた。その後も活躍していたが、桓武天皇の792年に安曇宿禰継成が詔命を承げず、人臣の礼無しとして罰せられた。そして絞刑に処せられるべきところ特旨をもって死一等を減じられ、佐渡に配流されるという事件が起こった。ここに安曇連（宿禰）は決定的なダメージをこうむり中央政界からその姿が消えてしまう。

この事件は安曇氏族の衰退の大きな契機であるが、しかし一つのきっかけにすぎない。奈良時代の律令制度に基づく官僚体制の中で古代からの有力氏族たちは衰退していった。藤原氏は一人勝ちのように勢力を伸ばしたが、他の有力氏族は政治の中枢から締め出され、衰退していった。安曇氏族も中央政治においては鳴かず飛ばずの状況になっていったと思える。この律令制度のなかでの貴族勢力の衰退については長山泰孝氏の「政治の起伏」（『古代を考える 奈良（三章）』直木孝次郎編 吉川弘文館 昭和60年）に詳しく書かれている。平安時代に書かれた新撰姓氏録には安曇宿禰は右京在として記載されているが、その頃に政治の表舞台で活躍したことの記録はない。他の安曇氏族についても同様である。

これが中央の歴史の大略である。次に全国に分布する安曇族ゆかりの地における状況について、これまでに知り得た情報をもとに、概略の様子を記す。ただしそれらはわずかな情報に過ぎず、今後ゆかりの地の人たちと協同してさらに深く探っていきたいと考えている。

1) 福岡市東区地域

平安時代に書かれた和名類聚に、筑前国糟屋郡（現在の福岡市東区付近）に安曇郷、志珂郷があ

ることが記載されている。そのために、この地が安曇氏族の本拠地と考えられている。この地域は弥生文化が渡来し繁栄した地域であり、紀元57年にはこの地で栄えた奴国が後漢へ朝貢し金印を授与された。その後西暦238年には卑弥呼が魏へ朝貢し、やはり金印を授与されている。このころの北九州地域の状況については魏志倭人伝に多くの記載がある。安曇氏族はこの地域で弥生時代から古墳時代にかけて活動し、繁栄したと考えられるが、しかしこのころの安曇氏族の状況は全く分からない。この地域では九州王朝に関心が集まっており、安曇氏族についてはあまり取り上げられていないようである。これまで志賀島歴史研究会の方たちから多くのご教示をいただいた。また多くの文献図書類から得た情報を基にして、この地域の安曇氏族について整理してみた。

卑弥呼の時代以降、大和王権が誕生する頃において、この地域で安曇族は大いに活動していたと思えるのであるが、詳細は不明である。そして6世紀の磐井の乱のときに糟屋の屯倉が登場し、安曇氏族の影がかすかに浮かんでくる。日本書紀によると糟屋郡地域は、磐井の乱（527～528年）の後糟谷の屯倉として天皇家に賠償として寄進された。その後、前述したことであるが536年にこの地に那津官家が設置された。そして那津官家の犬養部を統率するものとして、海犬養連が設立されたと推測される。しかし、ここに大きな疑問がある。なぜ「安曇犬養」ではなくて「海犬養」なのかという疑問である。糟屋郡は安曇氏族の活動拠点であり、従ってこの地の犬養部の統率者は当然のこととして安曇氏が任命されると考えられるのである。しかし海犬養連という新しい氏が登場した。この海犬養連は綿津見命を祖神として祀っており、明らかに安曇氏一族である。するとここには隠された謎があるように思える。

推測であるが、磐井の乱の後この地域が糟谷の屯倉として天皇家に寄進された時に、糟屋郡における安曇連の主だった人々は処分されたかあるいは追放させられたのではないだろうか。そしてこの地域の安曇連は公式的には消滅してしまっただけではないだろうか。しかしそれでもなお、糟屋郡における安曇氏族の係累は強く残っており、実質的に糟谷の屯倉を取り仕切っており、那津官家も取り仕切っていたと思われる。そしてこの安曇氏族の縁者たちが、氏族名を変えて、海犬養連として復活したのではないだろうか。

その後、大和と百濟連合軍が663年の白村江の戦いに敗れて、^な津^つ地域（博多湾地域）は唐・新羅からの侵攻に脅かされるようになった。そして那津官家の食料保管庫としての役割は終わったと推測される。それを契機にして海犬養連一族は畿内地域へ移住していった。一方糟屋郡においては、海犬養連の主力が移住してしまったために、その後の安曇氏族の勢力はすっかり衰えてしまったように思える。

しかしそれでもなお、旧糟屋郡地域には綿津見命を祀る神社が現在も多数残っており、安曇氏族の痕跡を示している。また糟屋郡のはずれに志賀島があり、ここには志賀海神社（祭神綿津見命）が存在しており、安曇氏族の系譜を残している。とはいえ、志賀島で安曇、阿曇を名乗る家は志賀海神社の宮司家のみである。これらはこの地域における安曇氏族の興廃を示しているのではないだろうか。

以上のことはいまのところ私の推測であり、今後の調査研究課題である。

2) 高島市安曇川町地域

滋賀県の高島市安曇川（あどがわ）町地域は安曇族ゆかりの地である。ここには高島市安曇族勉強会があり、そこの方たちから『安曇川町誌』抜粋、『まんが安曇川町の歴史』（滋賀県安曇川町）、その他関連資料を頂いた。それらをもとに安曇川町地域と安曇族の関係をまとめると次のようである。

安曇川町誌によるとこの地域には古代において安曇氏族が居住していた。安曇川の上流に古賀地区が

あり、ここで弥生時代の漁撈に使われた土錘^{どすい}が出土している。これは海人族がこの地域に定着していた証であるとしている。その後、安曇川下流へ進出し、安曇川町地域へ移動したとのことである。古文書には安曇（あど）と表示された小字地名が載っている。また、和名類聚集には隣接する琵琶湖湖北には伊香郡安曇郷があったことが記載されている。『角川日本地名大辞典』によると「あどのごう」と読むと説明している。そこに安曇橋と刻まれた石柱がある（現在長浜市高月町西阿閉^{あつじ}地区）。地元の方は「あどばし」と呼んでいる。そして湖北地域は戦国時代に激しい戦闘が何度もあり、古くからの家屋敷・寺院などはすべて焼けてしまい、古文書等は何も残っていないとのことである。

司馬遼太郎氏が『街道をゆく』シリーズの第1回目として「湖西の道」を書いている。その中で「湖西の安曇人（あずみびと）」という章を作って、安曇族について少し触れている。司馬氏は安曇族＝海人族という思いこみを持っており、安曇族のことを「どうも容貌がひねこびて背がひくく、一方、長身で半島経由してきた連中にくらべて一目みてもなり姿がちがったようにおもえる」と書いている。さらに「この琵琶湖の西岸にやってきた安曇族は、なんとも侘しげで、ひよっとするとほうぼうの海岸の同族と大げんかして、ついに内陸へのぼり、やっとこの湖をみつけてしぶしぶながら住みついたひねくれ者ぞろいだったかもしれず」と書いている。司馬氏の安曇族に関する認識について、私はかなり強い違和感を覚えるが、古代において湖西地方で安曇族が定着していたということには異論ない。湖西に限らず湖北地方にも広がって定着していたと考えられる。

この地域では、安曇の読みは「あど」である。町誌によると、音韻論的にはイズミは泉であり、井水とも表記する。これは水の出るところという意味であり、井戸と同じである。つまり井水（イズミ）は井戸（イド）と同じであり、結局ヅミとドは同じであり、その結果「あど」と発音されたと説明している。しかし、この説明は後から無理矢理つけた説明のように思え、実際はもっと深い事情が隠されているように思う。それはつぎのようなことから推察できる。

万葉集に安曇川に関する歌がいくつも載っているが、「安曇」と表記されずに「阿戸」、「阿渡」、「足速」、「足利」、「吾跡」と表記されている。記紀には阿曇と表記されているにも拘わらず、である。これは故意に「安曇」、「阿曇」を抹殺した結果のように思えるのである。

さらに町誌では、この地の安曇族は古い時代、継体天皇の時代よりも古くに三尾氏に征服され、さらにその後大和方面に強制移住させられたのではないかと推測している。すると安曇川町地域では、古代において壮絶な争いがあり、安曇族は抹殺されたことになる。そしてその際地名まで抹殺されたと思える。地名まで抹殺するような憎しみを伴った争いとはどんなものだったのか。

その結果として、安曇川町では安曇氏族の痕跡は少ないことは当然と考えられるのであるが、不思議なことに安曇比羅夫の墓と刻まれた石柱がある。ここが安曇比羅夫の終焉の地である根拠はなにもないのである。多分後世に地元の篤志家が建てたと思うが、安曇氏族の名残りのようにも思える。

また安曇川町には蒲生の薬師という安曇氏の氏寺があるとのことであるが、これも一体いつの時代に誰が建立したのだろうか。安曇氏族が残っていたのだろうか、不思議なことである。

一方安曇川町には綿津見命を祀る神社はない。なぜなのか不思議である。しかし湖北の旧伊香郡には綿津見命を祀る神社が2社残っている。

安曇川町地域は琵琶湖の畔にあるとはいえ、海とは縁のない内陸地域である。なぜ、海人族と言われる安曇族が進出してきたのだろうか。それは長野県安曇野市の場合と同様の謎である。ただし安曇川町の場合は、背後の山を一つ越えればそこは日本海であり、安曇氏族が九州から進出して来て定着していた地域である。そこから進出してきたと思えるが、今のところ明確ではない。

こうしてみると安曇川町地域には安曇族に関する大きな悲劇と深い謎とが眠っているように思える。これらは私の推測であり、今後地域の人たちと共に調査研究していきたいと思っている。

3) 田原市旧渥美町地域

愛知県旧渥美町は現在田原市に変わっているが、この地域は安曇族ゆかりの地である。ここには渥美安曇会があり、そこの方たちから『渥美町史』抜粋、『渥美郡史』抜粋、『渥美半島文化史』抜粋、その他多数の関連資料を頂いた。また『渥美町むかし探訪』（愛知県渥美町農業協同組合）も頂いた。それらに基づいて、渥美地域と安曇氏族の関係をまとめると次のようである。

渥美町誌等では、安曇族の痕跡として阿祖の磯あそいそといわれる場所や海人族の古墳などを指摘している。ここが安曇族ゆかりの地であることは疑う余地はないが、「渥美」と表記しているのはなぜなのだろうか。全国に多数の安曇族ゆかりの地があるが、その中で安曇・阿曇と表記しないのは渥美だけである。何か深い謎がありそうに思う。

渥美半島では舵子漁師は船に綿津見命を祀っているとのことである。渥美郡誌は、これは海路の安全を海神に祈るとともに祖先崇拜の延長とみるべきだろうと記載している。そして、神戸村新美潮海山に海神を祀っているのは安曇氏の勢力地だった証だとしている。

しかし渥美半島には綿津見命を祀る神社は残っていない。大きな疑問である。近隣地域において関係ある神社として、名古屋市北区の綿神社わたと蒲郡市の赤日子神社あかひこがある。これらの神社は式内社であり、延喜式えんぎしきおよび惣国風土記そうこくによると安曇族が祀る神社とされている。しかし現在の祭神は綿津見命ではない。従って表面的には安曇族とは関わりのない神社に見える。これは不思議というよりも、不自然に思える。この地域では古代において他氏族との激しい勢力争いがあり、安曇氏族はそれに敗れた。そこで名前の表記を渥美に変え、氏神の祭神も別神に変えて、しぶとく生き残ってきたのではないかという思いがする。

渥美半島には縄文時代の大きな貝塚遺跡が幾つもある。そこから多数の人骨も出土しており、漁撈中心の生活を行っていたことが分かる。縄文時代の貝塚遺跡は他の地域でも多数発掘されており、縄文人が積極的に漁撈を行っていたことが分かる。漁撈活動は、海人族と言われる人々に限らず、縄文時代からも行われていたのである。

また東海地域には弥生遺跡が多数在る。弥生時代の初めころに伊勢地方から海を渡って渥美半島へ到来した人々と、鈴鹿山地を越えて名古屋市地域へ到来した人々がいたと考えられる。名古屋市の朝日遺跡は東海地方における最初の弥生遺跡であり、大きな規模の集落跡である。豊橋市の篠東遺跡しのづかいせきは米作りを主眼とした集落であるが、隣接する瓜郷遺跡うりごういせきは半農半漁の生活をする集落だったとのことである。おそらく海人的特性を持った人々が居住していたと考えられる。

前述した綿神社、赤日子神社はこれらの弥生遺跡の至近距離にある。さらに東に隣接する浜松市にも多くの弥生遺跡があり、ここには綿津見命を祀った式内神社（延喜式に記載されている神社のこと）として六所神社、三嶽神社がある。これらの神社分布と弥生遺跡分布を比較してみると、東海地域に定着した弥生人たちの末裔が綿神社、赤日子神社、六所神社、三嶽神社等の綿津見神社を創建したように思えてくる。私は、安曇族の全国進出は弥生人たちの東方進出に混じって行われたと推測している。その観点からすると、東海地域に進出してきた安曇氏族がこれらの綿津見神社を創建したと推測することは合理的と思えるのである。

これらは私の推測であり、今後地域の人たちと一緒に調査研究していきたいテーマである。

4) 兵庫県太子町地域

兵庫県揖保郡太子町は安曇族ゆかりの地である。しかし地元ではあまり話題になっていないとのことである。地元の郷土史研究家からご教示を受け、『太子町史付録 ふるさと史話』（太子町）、その他播磨国風土記等の文献資料を勉強した。その結果をまとめると、次のようである。

前述したことであるが孝徳天皇のときに阿曇連百足、阿曇連太牟がこの地すなわち揖保郡石海里で大規模な灌漑工事を行って水田開拓をした。播磨国風土記によると、阿曇連百足たちは摂津国の難波浦上に住んでいたが、播磨国浦上の里へ移ってきたとのことである。石海里は浦上里の隣であり、ここを開拓した後はこの地に居住していたと思える。この開拓に際しては石海（島根県西部旧石見国）の人夫を連れてきたとのことであり、その故にこの地を石海里と命名したとのことである。このことから、当時安曇連は石見国も支配地としていたと推測される。そこも安曇族との関わりの深い地である。

太子町誌付録によると、平城宮跡から出土した木簡のなかに「播磨国揖保郡占上郷、・・阿曇・・」と記載されたものがあるとのことであり、この地に阿曇氏がいたことが分かる。また12世紀の播磨国古文書に7名の「安曇」の名前が記載されているとのことである。しかし、その後の安曇族の痕跡は消えてしまい、現在は不明である。

隣の摂津国は難波宮や難波津のあった地であり、大陸や西国から大和へ入る玄関口として栄えた。そこには安曇江があり、安曇氏族が海運に活躍していたことが推測される。福岡市の那の津に続く安曇氏族の第2の拠点と言える。と言うよりも、5～8世紀頃には安曇氏族は摂津の方で栄えていたと推測される。

先に述べたことであるが、401年の履中天皇の即位に際し、住吉仲皇子が天皇（即位前の太子）暗殺を企てた。兵を起して難波の太子の宮を襲撃したが、太子に逃げられてしまった。そのとき阿曇連浜子は淡路島の野嶋の海人を動員して、太子を追わせた。しかしあえなく失敗し、捕縛されてしまった。その結果、阿曇連浜子は死罪とされたが、恩赦されて入れ墨刑に減刑された。また野嶋の海人たちも罪をゆるされたが、^{こもしろみやげ}蔭代屯倉で働かされることになった。これらのことから、このころ安曇連は難波に住んでいて住吉仲皇子と懇意だったこと、そして勢力も大きく、淡路島の海人を支配していたことが分かる。

安曇連氏がこの事件の後、どうなったのかは不明であるが、この地で雌伏していたようである。そして6世紀ころから徐々に勢力を盛り返してくる。難波には7世紀には安曇氏の氏寺として前述した阿曇寺があった。649年、この寺に病臥していた僧旻法師を孝徳天皇が見舞いに訪れたとのこと日本書紀に記されている。この頃には阿曇連浜子の事件のダメージから立ち直り、天皇の近くに仕えており、難波の地で勢力盛んだったようである。

摂津国、播磨国、河内国は安曇氏族が活躍していた地域であり、興味深い地域である。いまは安曇氏族の痕跡は消えてしまったが、今後の調査研究が期待される。

5) 舞鶴市丹後地域

丹後地方（若狭湾沿岸地域も含む）にも安曇氏族の痕跡が色濃く残っている。舞鶴市教育委員会からご教示を受け、いくつかの参考図書を紹介された。それらを勉強した上で、この地域の安曇氏族について整理してみた。

ここは以前凡海郷が存在した地（舞鶴市大浦半島付近の旧加佐郡地域）であり、凡海連が居住していたと考えられる。これについては加藤晃氏の「幻の凡海郷と古代加佐郡の郷域」（『舞鶴地方史研究 第

44号』(舞鶴地方史研究会 平成25年)に詳しく書かれている。丹後地域は出雲の東側にあり、弥生時代に弥生人たちが九州方面から日本海沿岸に沿って進出してきて定着した地である。安曇氏族が弥生時代から全国各地へ進出していったことを考えると、丹後地域に安曇族が定着したことは容易に推測できる。そしてこの地を経由して、安曇川町地域へ進出していったと推測することも容易である。

凡海郷から海上約10キロのところに冠島(雄島ともいう)がある。この島は今でも「雄島まいり」という習慣が続いており、地域の人々の厚い信仰の対象となっている。「老人島(雄島)は古来から三ヶ村(野原、小橋、三浜)の氏神である」とされてきた。島の管理は凡海郷の野原、小橋、三浜村の人々が行っている。これらの事情について高橋卓郎氏が「漁撈習俗と民俗信仰」(『日本海と出雲の世界』、小学館、1991)に詳しく書いている。

冠島には老人島神社があり、現在の祭神は天火明命と日子郎命と言われている。凡海連の祖神は綿津見命であるから、祭神は綿津見命と思われるのであるが、そうではない。天火明命は海部氏の祖神とされている。安曇氏族は海人の宰に任じられ、海人族の統率者となっていたのであるから、海部氏は安曇氏の支配下にあったと考えられる。海部氏の祖神がなぜ冠島の祭神となっているのだろうか、不思議である。この地域では、古代に安曇氏族と海部氏族との争いがあり、安曇氏族は敗れて衰退したということかもしれない。その結果冠島の祭神は綿津見命から天火明命に替わったのだろうか。大きな疑問である。

この地域には安曇氏族関連の神社がいくつもあるが、祭神に関しては変遷があるように思われる。笑原(のほら)神社は野原、小橋、三浜村の総氏神と言われ、かつては野原村にあり野原神社と言われていたとのことである。現在は舞鶴市へ移転している。祭神は、かつては地域の氏神として凡海連の祖神である綿津見命が祀られていたと推測されるのであるが、しかしいまは別の神、天照大神他に替わってしまっている。

宇豆貴(うずき)神社は与謝野町にあり、式内社である。祭神として宇都志日金拆命を祀っている。宇都志日金拆命は穂高見命の別名であり、その点で安曇氏族(凡海連)が祀るのは当然と考えられるが、ここだけが宇都志日金拆命という名称を使っていること、そして地域での伝承に宇都志日金拆命が出てこないことはなぜなのだろうか。

大川神社は舞鶴市大川にある式内大社(式内社の中で大社と扱われている神社)であり、この地域では最高級の神階をもっているとのことである。かつては冠島(雄島)にあったものを遷し祀ったとの伝承があるとのことである(同上、「漁撈習俗と民俗信仰」高橋卓郎)。大川地域は凡海郷にあり、弥生時代に九州方面から進してきた人々が定着した地域であり、海人族の痕跡が強く残っているとのことである。現在は農業神として保食神(うけもち)を祭神としているが、私は古代では綿津見命を祀っていたのではないかと推測する。

矢田神社は『古代海部氏の系図』(金久与市、学生社、1999年)によると、式内社であり、いまは天火明命六世孫建田背命を祀っているが、かつては綿津見命を祀っていたとのことである。

このように見ると、安曇氏族は弥生時代に丹後地方(若狭湾沿岸一帯)へ進出し定着したが、その後8世紀頃には地域での勢力争いに敗れ衰退してしまった。そして安曇氏族としての名前は消され、神社の祭神も変えられたのではないかとと思われる。一方、冠島の雄島まいりは、古代に凡海郷に住んでいた安曇氏族の名残のように思える。

私はこのように思うのであるが、その根拠は今のところあいまいである。丹後地域、若狭湾沿岸地域は興味深い地域であり、今後地元の方々と一緒に調査研究したいと思っている。

6) 安曇平地域

信濃国安曇郡は前述したように、安曇族ゆかりの地であることは間違いないと考えるが、安曇氏族の痕跡が少ないことも確かである。全国に多数のゆかりの地があり、安曇郷と称する地が多数あったことが知られている。しかし安曇郡と称する地はここだけである。

長野県内には穂高神社、川会神社以外にも綿津見命を祀る神社がある。その詳細は後述するが、それらの神社と安曇氏族の関連の有無を調べる必要がある。安曇郡では中世以降において西牧氏、仁科氏、小笠原氏、武田氏、上杉氏等の勢力争いがあり、その中で安曇氏族の痕跡は消えていったように思う。

安曇氏族がいつ、どのようにして安曇平へ進出し、そしてどのように開拓していったのかについては、分からないことばかりである。それらを少しずつでも探り出したいと考えている。

このように安曇氏族は全国各地に分布し定着したが、その後衰退し消えてしまったようである。そこには安曇氏族の栄光と悲劇の歴史が、謎とロマンに包まれて埋まっている。これまでに得た情報はわずかであるが、それらからそのような姿が浮かび上がってくる。今後さらに多くのゆかりの地について、地域の人たちと共に安曇氏族の歴史を探っていきたい。

8 安曇族ゆかりの地

安曇族ゆかりの地が全国に多数あることはこれまで多くの学者や研究者たちによって指摘されてきた。ゆかりの地を探す方法として、一つは古代の文書や戸籍簿から安曇氏族関連の住人の存在をもとに探す方法がある。しかし残念ながら、古代の文書・戸籍簿はわずかしかなかったために、この情報から知りうるゆかりの地はわずかである。二つ目は地名から探す方法がある。「あづみ」とか「しか」とかの地名を基にするものである。この方法は単純明快で分かり易く、そして地方史を探るための重要な手がかりである。しかし、地名は長い歴史の中でさまざまな変遷があり、さまざまな変換が混じっているため、それらを取り除くことが必要である。例えば、「あづみ」では「安曇」の他に「熱海」や「安積」もゆかりの地であるという説がある。しかし静岡県熱海市では「安曇族とは関係ない」という見解をもっている。また兵庫県一宮町安積は地元の郷土史家によると「安曇族と関わる史実はなにもない」とのことである。さらに長野県南安曇郡安曇村（現在は松本市安曇という）は安曇族ゆかりの地と言う説があるが、しかし安曇村は明治の行政改革の際にその4地区が合併して安曇村と命名したことが始まりである。安曇氏族とは全く関係ない地である。

このような事情から、いまのところ安曇族ゆかりの地として判明している地域はわずかであり、まだ判明していない地域が多数残っていると思われる。ゆかりの地が明確になると、安曇氏族の安曇平への移動ルートもはっきりしてくると思われる。またゆかりの地の歴史や伝統文化等の地域情報を掘り起こすことによって、安曇氏族の特性や衰退した事情などを明らかにする手がかりが得られると思われる。前述したゆかりの地の情報はその第一歩である。

ゆかりの地の情報は地方の歴史の中に埋もれており、しかも孤立した情報である。つまりそれらはゆかりの地の地方史の中の1ページに登場しているのみであり、それだけでは安曇氏族の全体像を描くには不足な情報である。安曇氏族に関する情報はたくさんあるが、それらはみなバラバラの情報でつながりがないものばかりである。そこで全国に分布するゆかりの地の安曇氏族に関する情報を集め、記紀や古典等の情報と比較検証して、それらを合理的に織り上げることが望まれる。するとそこに安曇氏族の全体像が浮かび上がってくると考えられる。ゆかりの地の情報は多いほど、安曇氏族の全体像は完成度

が高まる。そのためまず、ゆかりの地を探し出すことが必要である。

9 綿津見命神社の調査

ゆかりの地を探す手法として、全国に分布する綿津見命神社の由来を調べ、その地域の安曇氏族の存在を探る方法がある。綿津見命神社は穂高神社殿から頂いた資料によると、全国に約820社ある。これには、宇都志日金拆命や豊玉彦命（綿津見命の別名）を祀る神社は除かれているので、関連する神社はもっと多いと思われる。これらの神社の多くは中世から近世において、その地域の漁撈関係の人々が、海の神としての綿津見命を祀ったものと考えられ、それらの地域は安曇族ゆかりの地とは関係ないと思われる。しかし中には古代から安曇氏族と関わってきた神社もあると思われる。その地は安曇族ゆかりの地と言える。

神奈川県、駿河湾沿岸の綿津見神社について調べてみた。神奈川県には弥生時代中期からの集落遺跡が幾つもあり、弥生人たちが進出してきていたことが分かる。しかし綿津見神社の数は少ない。それらのほとんどが中世以降に創建されたり、合祀されたりしたもので、安曇氏族との関連は見つからない。しかし1社興味深い神社があった。熱海市の隣の湯河原町に子之神社があり、その境内社に龍神社がある。ここは式内社ではないが創建は西暦700年と言われ、古くからある神社である。子之神社の祭神は^{おおなむちのみこと}大己貴命、^{すさのおのみこと}素戔鳴尊、他であるが、龍神社の祭神は^{わたづみのかみ}海住神（綿津見神と同じ）である。神社の由来には、竜王・妃・王子が船でこの地に到来し、この地を開拓したとある。宮司の話では、神社の長い変遷の歴史の中で祭神が変わっているが、本来の神は龍神社に祭られている綿津見神とのことである。竜王と言うのは豊玉彦命、またの名は綿津見命である。すると安曇族はこの地に進出してきて開拓したが、しかしその後安曇氏族は衰退して他の氏族にとって代わられたと言うことになる。現在ではその痕跡はほとんど残っていないが、ここは安曇族ゆかりの地といえる。

長野県で綿津見命を祀る神社として穂高神社（祭神穂高見命他）と川会神社（祭神底津綿津見命）が知られている。これらは延喜式に記載された古くからある神社である。この他に池田町に瀧澤神社、四賀村に青龍社、駒ヶ根市に七十五社、塩竈社、伊那市に龍宮社諏訪社稲荷社がある。これらの神社は延喜式には載っていないので、中世ないし近世に創建されたと思えるが、いつの時代に創建されたのか、安曇氏族との関わりはどのようなものか興味深い。海沿いの漁師町では海神である綿津見命神社を中世以降において創建し、祭祀している例は多数ある。しかし長野県のような海と関わりのない山国で海神である綿津見命を祭祀する理由はなんだろうか、興味深い。その他に、長野市稲里に式内社として^{ひかなとめ}氷鉋斗売神社があり、祭神は宇都志日金拆命である。この地が安曇氏族とどのような関係があるのか、調査が必要である。

なお、佐久平のサクは宇都志日金拆命のサクから命名されたという仮説をもとにして、佐久における安曇族について調べている研究者がいる。興味深い着眼と思うが、今のところこの仮説は根拠に乏しくて納得し難い。

安曇誕生の系譜を探る会では全国の約820社の綿津見命神社について、神社の由来を調べ、そして安曇族との関わりを明らかにしようと進めている。調査対象の数が多く大変でもあり、多くの人たちに呼びかけて共同調査として進めたいと思っている。

添付図 ゆかりの地分布図

